

A. チェホフ サハリン島より

—初期の樺太気象観測—

堀 内 剛 二

(ツアー制下でくるしんでいたロシアの人びとを
深く愛した 魂の歌いて チェホフ死が死んで、今
年は50周年である) (編集部)

初期の樺太気象観測といっても、以下にのべるのは、
大体のところがチェホフ「サハリン島」(1895年)に見
られる気象記事に多少の修飾をほどこした程度で、読者
の清鑑を期対することは些か思慮ないかも知れない。

* * *

アントン・チェホフが突如として流刑地踏査を思立
ち、鉄道敷設前のシベリヤを横断、樺太旅行を企てたの
は1890年(明治23年)の初め頃だった。今日もおそ
の眞因については不明のまゝ、チェホフの生涯の重大な
転機と結びついて傳記作者を困惑させている。チェホフ
の略傳については周知の通り、時に年30才であった。

モスクワ出発は1890年4月21日、ニコライエフスク
7月5日、同10日アレクサンドロフスク着。以後結氷期
までの3カ月を「凡ゆる部落を巡り、凡ゆる小屋を訪
れ、すべての人々と話し」(チェホフ書簡)で、徹底的な
実地踏査を行った。そして90年10月13日、同地を出
発、ペテルブルグ号に便乗して香港經由モスクワに帰っ
たのが12月7日日本訪問はコレラ流行のため実現しな
かったという。因みに明治23年は憲法発布の翌年、時
は第1回帝国議會開会の直前に当たっている。

「サハリン島」の執筆は1891~94年、文学作品と研究
論文とが入混った独特な、著者自身も「恐らく学位論文
の三つ位に相当する」と言っている、極めて興味深い調
査報告である。例えば、サハリンの気候について言えば

「読んだら寒気がして来るように気候の描写」(チェホフ
書簡)をするという塩梅である。日本人に関する記事も
散見される。(邦訳中村融、岩波文庫所収)

さて、サハリン北部アレクサンドロフスク管区の気象
観測が継続的に始まったのは1881年(明治4年)らし
い。というのは、1890年当時での年間の観測記録があ
ったと記されているからである。測候所はドウイカ河上
流コルサコーフ村(1881年建設)の医局監理者 P.I. ス
プルネンコ博士の家に附属して、同博士の管轄下にあ
った。スプルネンコという人は医者だったらしいが、
サハリンの動物を10年間研究し、素晴らしい博物館が出来
るほど沢山な標本資料を蒐集して、チェホフが其処を訪
れた時は数カ月前既にロシア本土へ引揚げた後だったと
いう。その時観測していたのはゴロワーツキイという
移住囚の書記で、チェホフはその男から気象表を買っ
た。

「この年間の観測から結論を得ることは充分可能なの
で、わたし自身にも、実は、少なからず退屈なことでは
あるが」と前置きして、「気候もへちまもあったものでは
ない」そのサハリンの気候につき記している所によると
「アレクサンドロフスク管区の気候は海洋性で、その不
定性、つまり、1年の平均温度や降雪日数などの著し
い変動などがその特色である。」1年の平均温度は1.2°C
~-1.2°C (平均0.1°C)、降雪日数は102~209日(平
均189日)、をそれぞれ上下する。悪天候で知られるノヴ
ゴロド県チエレボヴェツキイ郡と月平均を較べると、
それ以下であることが分る。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ア 官 区	-18.9	-15.1	-10.1	+0.1	+5.9	+11.0	+16.3	+17.0	+11.4	+3.7	-5.5	-13.8
チエ郡	-11.0	-8.2	-1.8	+2.8	+12.7	+17.5	+18.5	+13.5	+6.8	+1.8	-5.7	-12.8

山に近い凹地の雪は7月末に漸くとけ、1889年7月24
日には大して高くない山に雪が降り、ドウイカ河の解氷
は9年を通じ最も早いのが4月23日、最終が5月6
日、年に181日は大寒で、151日は寒風が吹きすさぶ。
おまけに「桁はづれの湿気」と「塩分を含んだ海霧」。
こうした気候が農事衛生に影響するのは言うまでもない

ことで「よりよき生涯に対する期待をも永久に失って」
しまう惧のあることを指摘している。なお「測候所には」、
ペテルブルグ中央観象台で検査の上購入されたい
ろいろの機械が備えつけられている」とあるが、名は挙
げていない。

同じく少し距ったサハリン北部チウイミ管区について

は、ルイコフスコエ村に気象観測所があって、創設以来4年といえば、1886年(明治19年)頃の観測開始である、1年の平均は零度以下、山に囲まれた盆地のようで、前者より無風日が60日程多いが、天候は同様に悪く、雪が16日、雨天76日、雨雪量はトウイ三管区が300耗多くなっている、1889年7月24日には霜、同8月18日は大寒で共に被害があったとする。

更に「南サハリンの気候については、目下のところでは、この地に勤務したり或はこのわたしのようにわづかの間にへ来ていたような多くの著述家たちの断片の一次的な観察によって判断するより法がない」と言っている。このコルサコフスク管区は北部よりはいくらか温暖で、冬の間でも時に雪どけがあり、太陽の雲間を洩れることも多いが、それでもクソンナイで149日、ムラヴィヨフスクで130日の悪天が数えられるとした。

ついで乍ら、サハリンの風景描写の一例を示すと「わたしがアルカイへ出かけて行ったのは、7月31日の朝8時であった。ちょうど干潮のはじまっていた。雨の気がにおった。どんよりと曇った空、帆影一つ見えない海、険しい粘土質の海岸などが荒々しい感じだった。波浪は、茫々と、物悲しく、立騒いでいた。高い岸辺からは、やせ衰えた、病んだような樹々が見下していた。この僻では、その一樹一木がそれぞれ大寒や冷風との荒々しい闘争をつづけているのであって、秋や冬の恐ろしい夜半でも、絶えず揺れ動き、地にたわみ、訴えるように見まなければならぬ——が、誰もこの訴えた耳を籍さうとするものはいないのだ」

だがチエホフのこの「サハリン島」は多くの人の耳を傾けさせたのである。

南サハリンの気候を温暖にする為間宮海峡に堤防を築いて寒流を中断する方法について「なるほど西岸南部の植物帯は、或は数十種の新種を加えて豊富にはならぬが、島の南部全体の気候はほとんど改良されることはないと思われる」と述べ、北東風によるオホーツク海の影響に言及している。その可否は別として、気候に対する真剣な関心を伺うことが出来よう。従って、上記コルサコフスク管区内の測候所設置に積極的に意見を呈出しているのも、敢て驚くに当たらない。

「南サハリンでは場所々々によってそれぞれ気候が独特なのだから、一ぱん確実なのは同時に数カ所(地名略)に気象観測点を設けることである(略)。このためには教育ある追放囚を役立たせれば好いと思う。彼らは既に今までの経験の示す如く、独りで観測することには、ちぎに慣れるものだ。必要なのは、たゞそれら指導にあたる人だけである」

こゝで些か註釈を加えることを許してもらって、帝政ロシアの気象観測組織について述べよう。(A.L. Rotch, The Organization of the Meteorological Service,

Amer. Met. Journ. 1888)

帝政ロシアの気象観測の始まりは1726年で、ペテルブルグの学士院(Academy of Sciences)がこれに当たった。観測網が一応整備されたのは1849年、鉱山省関係予算でペテルブルグ中央観象台(Central Physical Obs.)が成立して以来である。当時1級観測所8、2級観測所48。だが人員と予算の関係で仲々うまくゆかなかつたらしく、1865年再び学士院に移っている。そしてDr. WildがPhysical Obs.と附属観測網の再編に着手、その成ったのが1871年、以後次第に発展した。1870年にメートル法を1878年には国際観測方式をそれぞれ取入れる、という順序である。そして1887年では、Cent. Phys. Obs.に報告する観測所は280カ所に達し、そのうちには水路局所管の燈台と臨港観測所54が含まれている。このほか、雨や雷雨の観測者が600ほどあって、その大部分は特志観測であった。

当時は既にカテリネンブルグとイルクーツクに新しく中央観象台が出来ていて、それぞれシベリア西部と東部が管轄であり、また特に太平洋の観測所はウラジオストクの水路部の監督をうけていた模様である。

所で面白いことは、チエホフが南サハリンのコルサコフスクに来ていた時、たまたまカムチャッカとオホーツクの気象観測所設立のため奔走中の上記イルクーツク中央観象台長のE. V. シュテリングが丁度同地に來合せていて、チエホフの宿舎に当てられていた警察書記の住居で会っていることがある。9月12日の夜で、追放徒刑囚の焼いた硬い肉を食ひ、アルコールと言った方がいゝようなウオトカを飲み乍ら、前に記した測候所設置についてのチエホフの意見は、このシュテリングに対してなされたものだが、この夜のことであったかどうか、そこまでは書いてない。その夜半から北東風が吹き出し、海上は嵐になった。「翌朝は、寢床の中も、部屋も、戸外も寒かった。外へ出て見ると、冷たい雨は降りそゞぎ、烈風は樹々をへし曲げ、海は吼えていた。(略)わたしは波止場に近い海岸づつに街を一巡した。草も濡れそぼち、樹々からは雫がたれている。波止場の監視所のわきには、鯨骨が泥濘の中に横たはって(略)雨の叩くにまかせてあった……」

* * *

維新前後の日露交渉は、日米関係同様に極めて興味深い史話を織りなしている。ディアナ艦長ガローニンの松崎幽囚、文豪ゴンチャロフの長崎渡来、革命家バクーニンの来航、など。そしてチエホフが若し日本に立寄っていたら、ということも空想の種にはななくはない。当時は1875年の樺太千島交換条約で、樺太全土が露領であった。だが南サハリンには日本人部落があって、日本領事館もあり、チエホフは時の領事久世にも会っていて、日本人の露語研究の進歩などを賞讃しているのが見られ

る。それは兎も角、国土の広さは別として、帝政ロシアの気象観測網整備が割合おそく、チエホフのサハリン旅行当時なおへき地の観測所設置が進められていた模様が極東流刑の島サハリンの風物ともども上記で知られる。

露人に関係したことをもう一言つけ加えると、長崎の蘭人を除けば、日本で最も早く気象観測を行ったのが露

人であった。「北海道志」巻之二六の大気測量の項に「函館は安政 6 年（1859 年）より万延元年に至る 2 年間露医巫留武羅契吐（アルブラケット）の観測なり以後 7 年は測を欠く」云々とある。幕末の開港場函館で気象観測をしたこの露医について兼て調べたいと思いながら、筆者はまだその機を得ないでいる。（高層气象台）



ビキニ環礁附近海域の 調査について

杉 浦 吉 雄

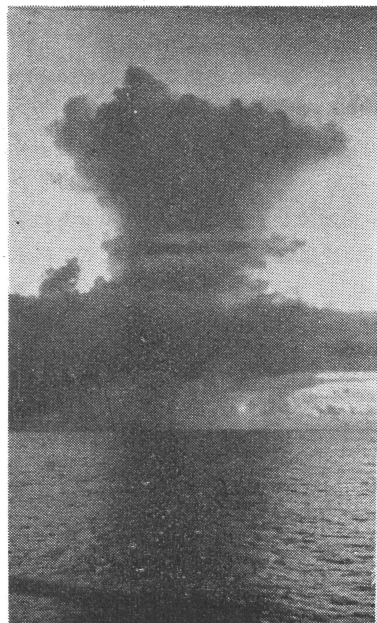
1. まえおき

第 5 福龍丸の被災事件以来、相ついで、原爆マグロの登場、放射能の雨や塵埃と、日本国民は、米国の水爆実験によって、大いに迷惑を蒙っている。この事態に対しては、今後、水爆実験禁止という外ない。また、すでに行われた水爆実験の影響を調べることの急務を痛感する。

2. 調査目的および準備

水産庁は、南方漁場の放射能による汚染の現状を正確に把握するため、調査船の現地派遣を企図し、その立案を日本海洋学会および水産学会に頼んだ。学会の主幹部は、各方面の知識をあつめて、精細な方針をたてた。このとき決まったコースは、グアム島を補給基地として、

米国の指定する拡大危険水域の外まわりを、ジグザクに、ビキニ島に近づいたり、遠のいたりしながら、一まわりすることであった。この案では、ビキニ島にもっとも近づいたときでも、およそ、500 マイルは距っている。この立案当時



は、まだ、水爆実験の中止が発表されていなかったで、このように用心して、コースを撰んだものであった。この会議に出席された諸先生（後に、2〜3 名が追加された。）が、所謂顧問団を構成する。顧問団の仕事は、調査の方法や諸経費を決め、われわれ調査団の各員を詮衡することであった。顧問団は、正確な資料に基いて、必要な経費を 3000 万円と計上したが、大蔵当局は、1400 万円に削った。予算削減のシワ寄せは、主として、研究費と人件費に向けられた。しかも、予定の 5 月 8 日出港に対して、予算決定は 5 月 6 日であったので、調査団は、折角、用意した研究資材を返納したり、かねて聞いていた特別手当を取止めにされても、とやかくいう時間もなかった。調査団の人々は、諸準備に忙しく、大方は、5 月初めの連休にも休まなかった。それでも、準備が間に合わず、止むなく、出発は 5 月 15 日に延期された。出発寸前、米国は、グアム島の代りに、ウェーキ島に寄港せよと通告してきたが、顧問団が航路の撰定をする暇はなく、調査団に一任された。この頃、ある新聞は、今回の調査が陸上の顧問団による遠隔指導によって行われるものであると報じた。この記事をみて、憤慨しない調査員はいなかった。われわれは、試料集めの単なる器械なのか。しかし、事実、われわれが単なる器械でもなく、顧問団にしても遠隔指導された覚えはなからうと信ぜられる。とはいっても、正直のところ、調査団の一部には、何かにつけて、物事をひねくれて考える風があったように思う。俊鶴丸は 25 年の老朽船であるから、調査後使いものにならなくても、惜しくはない。乗る人間も、この船と同じようなものを選んだのだろう。他に、こういうものもある。出発の数日前、科研で行われた調査団のための特別講習会の席上、ある団員が、放射医学の一權威に、放射性汚塵の防禦法につい